# 心ひとつに

弥富市立桜小学校
学校だより
No.13
平成26年10月15日

**努力は素質を上回り、気力は実力を超える！**

いよいよ、明日は南ブロックのサッカー・バスケットボール競技会です。夏休みから今まで、仲間と心をひとつにして、仲よく、誠実に練習に励んできたと思います。練習を通して、体力アップ、技術の習得だけでなく、挨拶・礼儀・規律という面でも、感心させられる光景を随所に見ることができました。

おりしも、サッカーのＵ－１９日本代表が韓国に勝利し、決勝トーナメントへの進出を果たしました。韓国戦での勝利しか、決勝トーナメント進出の道が残されていない土壇場に立たされた日本代表の試合の様子や戦いぶりは、皆がメンタルを高めて戦い、まさに気力が実力を超えるものだったようです。

明日の大会を前に、上記の言葉を贈ります。勇気を出して、戦い抜いてください。

平成２６年１０月１５日

**人生を変えた「ありがとう」ーニューモラルより**

元ＮＨＫアナウンサーの鈴木健二氏は、自著『有り難う物語』の中で、次のような実話を紹介しています。

**生きることに疲れて**

数十年前のこと。ある男性が、妻と二人の子どもを残して交通事故で亡くなりました。しかも、事故の加害者とされたため、残された家族は、弁償のために家を売り払わなければならなくなったのです。その後、知人宅の納屋に住まわせてもらうことになったものの、そこは納屋ですから、裸電球をつけなければ昼間でも室内は真っ暗です。水道は、屋外にあったものを使わせてもらい、煮炊きは七輪に火をおこして行いました。

お母さんは、早朝からビル清掃の仕事に出かけ、昼は子どもたちが通う小学校で給食の手伝いをし、夜も料亭で皿洗いをするという毎日でした。そんな生活が2.年も続くと、さすがに疲れ果てたようです。

ある朝、お母さんは、小学校５年生の長男の枕元に「今夜は豆を煮ておかずにしなさい」という手紙を置き、作り方を書き添えて仕事に出かけました。しかし、そのとき、おかあさんは、子どもたちと一緒に死んでしまおうかとまで思い詰めていたのです。そして、その夜遅く、子どもたちが寝静まったころに、睡眠薬を大量に買い込んで帰ってきました。

**「お母さん、ありがとう」**

お母さんは、ふと気付きました。お兄ちゃんの枕元に紙が置いてあり、そこに何か書いてあるようなのでした。お母さんは、その手紙を手に取りました。そこにはこう書かれていたのでした。

「お母さん、お帰りなさい。お母さん、ぼくは、お母さんの手紙にあった通りに豆を煮ました。豆がやわらかくなったときに、おしょうゆを少し入れました。

夕食にそれを出してやったら、弟がお兄ちゃん、しょっぱくて食べられないよと言って、ごはんに水をかけて、それだけ食べて寝てしまいました。

お母さん、ごめんなさい。でも、お母さん、ぼくは、本当に一生懸命豆を煮たのです。お母さん、今夜も疲れているんでしょう。お母さん、ぼくのために、働いていてくれているんですね。

お母さん、ありがとう。おやすみなさい。さきにねます。

読み終わったとき、お母さんの目からはとめどなく涙が溢れました。

「お兄ちゃん、ありがとう、ありがとうね。お母さんのことを心配してくれていたのね。ありがとう、ありがとう、お母さんも一生懸命生きていくわよ」

お母さんは、豆の袋に残っていた一粒の豆を、長男の書いた手紙に包みました。そして、それをいつも肌身離さず持っているということです。

もし、この手紙がなかったら、一家はお父さんの後を追っていたことでしょう。それを救ったのは、子どもの「お母さん、ありがとう」の言葉だったのです。